

2022年6月6日発行
www.tokushukai.jp

発行 ■ 一般社団法人徳洲会
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL : 03-3262-3133
制作 ■ 一般社団法人徳洲会 広報部
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-3-1 東京堂千代田ビル14階
TEL : 03-3288-5580 FAX : 03-3263-8125
Email : news@tokushukai.jp

徳洲新聞

TOKUSHUKAI MEDICAL GROUP NEWS

ALL LIVING BEINGS
ARE CREATED EQUAL

6/JUN.2022

No.1341



学生からの質問に答える河内副院長



湘南鎌倉医療大学国際災害サークル モルドバ派遣中にオンラインで交流会

NPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）は、ウクライナ難民支援活動の一環でモルドバ共和国に調査チームを派遣中の5月14日、現地滞在施設と湘南鎌倉医療大学（神奈川県）をインターネット回線で結び、同大学国際・災害サークルに所属する学生とオンライン交流会を実施した。TMATは昨年同サークルと交流、今回、現地から生の情報を伝えることで、支援活動への理解を深めてもらうために企画した。

TMATはモルドバのNGOと連携し、同国に逃れてきたウクライナ難民への生活物資の支援や、ウクライナ国内の医療機関に医薬品などを支援。5月9～14日にかけてTMAT理事を務める湘南鎌倉総合病院(同)の河内順・副院長兼主任外科部長、武蔵野徳洲会病院(東京都)の原田生代美看護師(兼ロシア語通訳)、TMAT事務局員でロジスティクス統括の野口幸洋・一般社団法人徳洲会医療安全・質管理部課長補佐の3人が、NGOと長期的な支援活動に向けての協議や、医療支援ニーズの調査のためモルドバを訪問した。

交流会ではまず、野口・課長補佐がモルドバでの活動内容や支援先、同国内の医療事情など動画を交えて説明。同サークルが提供した歯ブラシを支援先に寄贈した際の様子なども動画で伝えた。

河内副院長、原田看護師は滞在中に見聞した現地の様子などを紹介。「モルドバの状況は落ち着いており、ウクライナ難民の方々が医療を受けられず困っているという声はありませんでした。ただし戦争の行方によっては医療ニーズが急増し、状況が変わる可能性があります」(河内副院長)。この後、ウクライナ難民の生活や健康上の問題、子どもの教育問題などについて活発な質疑応答を行った。

また、「提供の意思が明確な場合は、可能なら事前に6〜7cc程度の血清をいただくと助かります」(渡邊和誉・公益財団法人兵庫アイバンク事務局長兼コーディネーター)など、具体的にいつ、どこで、何をすればスムーズに届出できるか手順を協議。竹田副院長が事前に用意していた臓器提供マニュアルのた

き台は、関係者らの話し合いの下、この日に何度も変更し、より現実に対応したものとなった。遺体へのメイクなどエレンゼルケアは、首から下は前もって実施可能で、ひげも事前にそることができ、顔のメイクは届出後に、と細かな事項も確認し合った。

竹田副院長は以前、看護部長から医療者の知識不足から臓器提供の希望があったにもかかわらず動けなかった事例があったことを聞き、同院への赴任と同時に院内の臓器提供体制の構築に乗り出した。「今回のシミュレーションはマニュアルなどの改変箇所があまり出ないが、関係者同士の顔合わせもでき、目的は達成できたと思います」と竹田副院長は振り返っていた。

本人・遺族の思いを汲む

国内初「献眼シミュレーション」

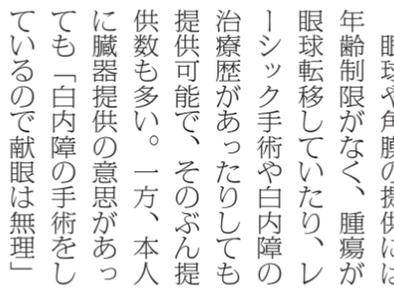
神戸病院が実施

献眼シミュレーションは3月10日、担当状態(体内にがんがある状態)の90歳男性が意識レベル低下により、神戸病院に救急搬送されてきたという想定でスタート。余命わずかの見とおしで、意識も戻らず、延命治療の希望は本人からも家族からもない。以前から「亡くなったら使える臓器は提供したい」と本人が話しており、臓器提供したいという旨を記した意思



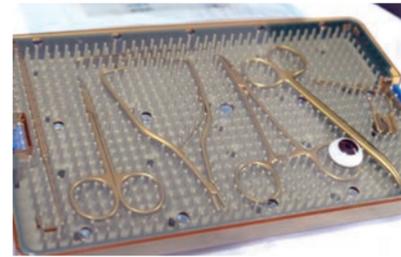
臓器ごとの医学的適応を説明する竹田副院長

表示カードも携帯、家族も同じ思いであることから、具体的な臓器提供の適応の判断に移った。臓器提供にはいくつかの条件がある。本人の拒否、被虐待児、司法解剖の実施など社会的不適応はもちろん、各臓器によってドナー(臓器提供者)側の年齢制限があり、全身性感染症やHIV(ヒト免疫不全ウイルス)感染症、提供する臓



家族役の職員が同意書にサインする際、届出直前まで辞退可能と説明を受ける

器の部位によっては腫瘍や中枢神経疾患の有無など医学的不適応も事前に精査する必要がある。眼球や角膜の提供には年齢制限がなく、腫瘍が眼球転移していたり、レシーク手術や白内障の治療歴があったりしても提供可能で、そのぶん提供数も多い。一方、本人に臓器提供の意思があっても「白内障の手術をしているので献眼は無理」



義眼は火葬で燃える素材で作られている

などと、適応条件をよく知らないがゆえに家族が最初から諦めてしまうケースもある。「医療者が正しい知識をもち、どのような条件が不適応となり、どの場合なら適応か理解し説明できないと、患者さんやご家族の思いをくみ取れません」と、同院で移植コーディネーターを務める竹田洋樹副院長は院内教育の大切さを強調する。コロナ禍のため大規模研修などは実施できないが、今回、院内外の関係者の顔合わせも兼ね、最小限の人数でシミュレーションを実施した。

臨床に役立ち世界にも発信

英語論文執筆・投稿を推奨

髙田・庄内余目病院部長



「英語論文執筆は臨床医として大切なことが身に付きます」と髙田部長

庄内余目病院(山形県)の髙田泰之・心臓血管外科部長は同院で2カ月間の地域医療研修を行う初期研修医に対し、英語論文の執筆、投稿を推奨している。研修中に経験した症例で医学研究として意義のある症例に関し、日本農村医学会の公式ジャーナル『Journal of Rural Medicine』にCase Report(症例報告)の投稿を呼びかけている。

髙田部長は「農村地域は第一次産業の従事者が多く、生活スタイルに配慮した治療法が求められます。診療の参考になる症例を報告するのは我々の責務です。論文の作成過程で、さまざまな情報を整理し論理的に考察するスキルが身に付き、要点を的確に伝えるトレーニングになり、臨床に役立ちます。また英語論文とすることで世界に向け発信できます」と強調する。

興味をもった研修医には、文献整理ソフトの使い方からテーマ設定、何をどう強調するかなどについてアドバイス。これまでに2人の研修医が計3本の論文を投稿、掲載された。髙田部長自身、30歳頃に3年間、英国で基礎研究に打ち込み、論文作成のノウハウを身に付けた。「一文一文を大切に細部まで意識し、見た目の美しさにもこだわる姿勢」を養ったという。今後も後進の育成に力を入れていく。